



あさり資源の再生～地元アサリ稚貝の確保に向けた取り組み～

前潟干潟研究会

大野瀬戸について

前潟干潟研究会の活動場所である大野瀬戸は、広島湾奥に位置する海峡であり、日本三景の安芸の宮島と対岸の廿日市市の間にある。

大野瀬戸ではカキやアサリが育まれ、それぞれが地域ブランドとして知られている。

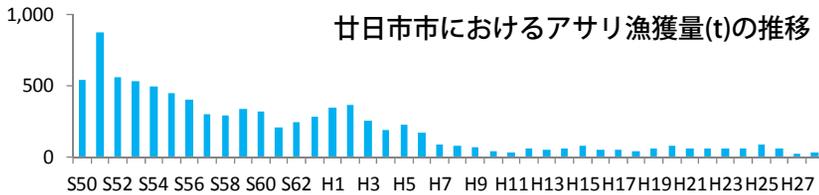


干潟の現状とアサリ資源再生活動の変遷

(1) 干潟の現状

アサリは、大野瀬戸に点在する複数の干潟に生息する。現在、大野瀬戸を有す廿日市市のアサリ漁獲量は、ピークにあった昭和51年876トンの1/10以下まで落ち込んでいる。

アサリ資源が大幅に減少した理由は、海域の貧栄養化・クロダイ等による食害など様々あるが、現在問題となっているのは、資源の大幅な減少によるアサリ親貝の不足、それに伴う稚貝供給量の低下である。



(2) アサリ資源再生活動の変遷

課題である「親貝不足」を解消する第一歩として、被覆網を用いた食害対策を導入し、20年度に一般化し、一定の成果を得た。

しかし、資源の回復には至らず、再生産に寄与する地元産稚貝の確保が必要と考えられた。そこで、「前潟干潟研究会」を平成25年度に結成し、地元稚貝の確保・保全を目標に取り組みがスタートした。

設立当初は、ケアシエル等を用いた「網袋採苗」を実施した。しかし、袋が埋まる・流される、場所の選定が難しいなどが課題となり、稚貝の確保は上手くいかなかった。

そこで、春先に米粒大のアサリが数多く生息する干潟で、稚貝の集積場所を見つけ、その場所で砂ごと網袋に入れ稚貝を短期間保護・育成する方法「大野方式」を平成27年度に考案し、現在、200万個に及ぶ稚貝の確保に成功し、中期目標の400万個を目指し、活動を続けている。

アサリ稚貝の確保「大野方式」の内容（写真は、稚貝採取方法）

4月 ①場所選定	5～6月前半 ②稚貝採取	5～8月 ③保護育成	8月～ ④被覆網保護
稚貝分布調査	砂ごと網袋に稚貝を採取	網袋を採取場所に設置し保護	各自の被覆網で保護
殻長4mm前後		殻長10mm (移植適合サイズ)	殻長30mm 以上まで

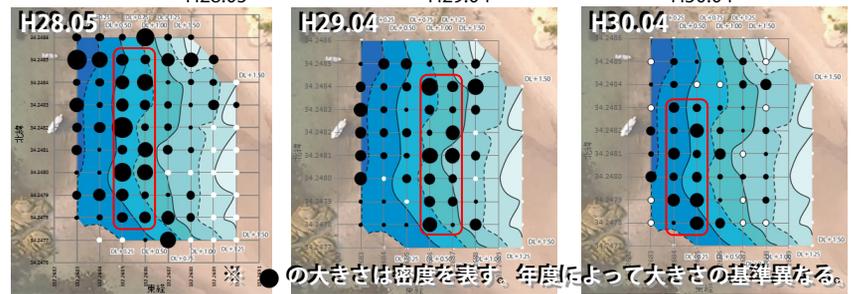
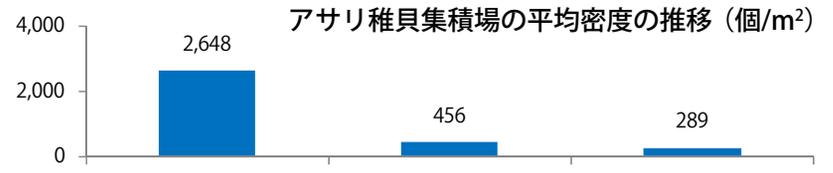


稚貝確保に係る新たな課題とその対策

(1) 新たな課題

大野方式におけるアサリ稚貝の確保は、稚貝の集積場における生息密度とその分布状況を事前に把握し、適地を選定することが極めて重要である。その稚貝密度が、年度によって大きく変化することが、ここ3ヶ年の取り組みで明らかとなった。

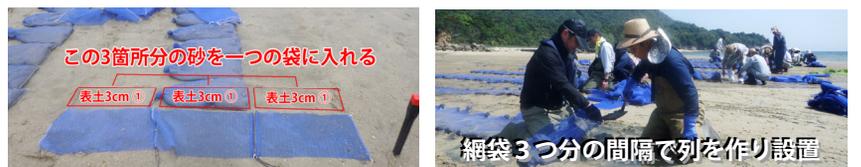
大野方式を本格始動した平成28年度の稚貝集積場の平均密度は約2.6千個/m²（最大1.1万個/m²）あった。しかし、翌年度から稚貝密度が低下し、今年度は最大で1.1千個/m²、平均289個/m²となった。また、主要集積場の分布範囲も、28年度は地盤高DL+0.5～0.75mに対し、29年度はDL+0.75～1.0m、30年度はDL+0.25～+0.5mと変化した。



アサリ稚貝集積場における稚貝密度分布（赤枠は主要集積場）

(2) 対策

27年度に好調だった上記干潟の稚貝生息密度が、昨年度より大幅に減少したことから、現在は、新たな干潟2箇所を加えて稚貝を確保している。また、これまで表土3cmの砂を1回採取し、網袋に収容してきたが、稚貝の密度がやや低い場所では採取面積を3倍に広げて（3回採取）網袋に収容・設置する工夫をした。



活動の効果と課題

当該組織が中期目標とする稚貝確保量は400万個である。その目標達成のために、平成29年度以降、参加者を募り、袋の設置数を1万袋まで増やすことができた。ただし、上記したアサリ稚貝密度の大幅な減少により目標達成には至らなかった。しかし、①稚貝集積場の干潟を新たに2箇所見つけたこと、②稚貝の採取面積を増やす工夫をしたことにより、年間200万個前後の稚貝を3年に亘って確保できたことは大きな成果である。今後も、稚貝分布調査で場所を選定し、目標を達成できるよう、活動を進めていく。

年度	稚貝確保の実績		
	設置袋数	参加者数	回収個数
H27	458	83人・日	59万個
H28	3,400	170人・日	268万個
H29	10,400	530人・日	220万個
H30	10,250	565人・日	192万個